

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

津波の記憶を刻む文化遺産：
寺社石碑データベースの今後の展望＜基幹研究：
津波の記憶を刻む文化遺産：
寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージ
アムへの改良＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2022-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日高, 真吾 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009951

津波の記憶を刻む文化遺産

—寺社石碑データベースの今後の展望

日高 真吾

2017年11月に国立民族学博物館（以下、民博）で一般公開された「津波の記憶を刻む文化遺産—寺社・石碑データベース」（以下、寺社・石碑DB）は、フォーラム型情報プロジェクト「津波の記憶を刻む文化遺産—寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良」において、2020年度から2021年度にかけて改修をおこなった。本稿では、このプロジェクトで実施した寺社・石碑DBの改修の内容を紹介するとともに、これからの展望について述べたい。

寺社・石碑DBは、2011年の東日本大震災をきっかけに開発された。東日本大震災で甚大な津波被害を受けた三陸沿岸部は、津波常襲地帯であったにも関わらず、過去の津波災害の教訓を記録していた石碑や寺社の伝承が十分に活かされていなかったことが震災後に明らかになったためである。また、こうした傾向は、紀伊半島をはじめ、津波災害の記録を残している寺社や津波碑が存在するほかの地域でもみられることが徐々にわかってきた（寺村 2021: 94-101）。このような調査結果を受け、吉田憲司館長（当時、文化資源研究センター・教授）は、寺社・石碑DBについて、「データベースを、被災地各地域のコミュニティ単位で過去の記憶や今回の津波の記憶に関するさまざまな情報や画像・映像を集積するためのプラットフォームとして活用し、それをネットワーク化することで、いわば震災の記憶のデータバンクを生み出せないかと構想している。」と述べている（吉田 2012: 2-3）。

そこで、寺社・石碑DBは、津波に関する全国各地の寺社や石碑、銘板などの情報を地図（位置情報）と現地の写真を組み合わせ、インターネット上で公開できるように設計した。また、寺社・石碑DBに関心をもった人びとが、申請手続きを取り、民博の管理者によって「協力者」として登録されると、情報を登録できる機能をもたせた。このことによって、多くの協力者とともに、データベースを成長させていく仕組みを整えた。

寺社・石碑DBの課題

改修前の寺社・石碑DBは、管理者である民博からユーザーに対して一方的に情報を提供するものではなく、データの登録権限をもった協力者とともに、その内容の充実化を図っていくことを大きな特徴としている。しかし、多様な協力者が自由に情報を追加するにあたって、さまざまな課題が予想

されたことから、公開後、3回のワークショップをおこない、その課題抽出に努めた（日高 2021: 6-7）。その結果、3つの課題が明らかとなった。1つ目の課題は、「データベースの管理者と協力者の権限の差異化」である。改修前の寺社・石碑DBでは、管理者と協力者の登録権限が同等であったことから、管理者が把握しないままに、寺社・石碑DBの目的に適していない、新たな入力項目が追加される危険性が明らかとなった。2つ目の課題は、「複数の地図情報の導入」の検討である。寺社・石碑DBでは、もともと Open Street Map で所在地を示していた。しかし、この情報だけでは、所在地の立地環境や周辺の自然環境などのイメージが理解しにくいという意見が寄せられ、複数の地図情報を導入することが提案された。3つ目の課題は、「更新履歴のアーカイブス化」である。震災後、寺社・石碑DBに登録されている三陸沿岸部の津波碑は、復興工事に伴って、多くのものが移設されている。ここに移設先の新たな位置情報を付与すると、移設前の位置情報がみられなくなるという問題が指摘された。そこで、フォーラム型情報プロジェクト「津波の記憶を刻む文化遺産—寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良」では、これら3つの課題を解決すべく、寺社・石碑DBの改修をおこなったのである。

寺社・石碑DBの改修

寺社・石碑DBの改修のなかで課題1は、管理者と協力者の登録権限の差異化を図った。具体的には、管理者しか修正、変更ができない項目と協力者が入力できる項目を切り分け、協力者が新規に項目を追加したい場合は、管理者である民博と協議し、認められれば、管理者である民博が新規項目を追加することとした。つぎに、課題2は、国土地理院が公開している標準地図と航空写真（図1）へのリンクを貼り、地図情報の複層化を進めた。このことによって、所在地の周辺環境がイメージしやすくなったと考える。また、課題3は、現在の登録データのテキスト情報の変更をアーカイブできる機能を追加した。このことで、更新前の登録情報が履歴として残り、最新の登録情報と比較できるようになった。

寺社・石碑DBの今後の展望

今後の寺社・石碑DBの課題は、現行登録されている483件のデータから、さらに多くのデータをいかに追加していく

日高 真吾（ひだか しんご）

国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授。専門は保存科学。著書に『災害と文化財—ある文化財科学者の視点から』（千里文化財団 2015年）、編著書に『継承される地域文化—災害復興から社会創発へ』（臨川書店 2021年）などがある。



図1 航空写真からみた所在地情報

のかという点である。今後も、寺社・石碑DBは、当初の目的の通り、たくさんの協力者とともに津波災害に関する情報を追加し、地域で埋もれていた過去の津波災害の記憶を掘り起こし、防災を考えるための役割を担ってもらいたいと考えている。

そのためには、どうすればいいのか。まず考えられることは、できる限り多くの人に寺社・石碑DBの有効性や登録作業に関心をもってもらうためのワークショップを企画していくことであろう。また、筆者が専門とする保存科学の分野では、3Dスキャナーや光学撮影の技術を用いて石碑の表面情報を取得する研究が数多く進められている。こうした技術を用いて筆者らは、表面が摩耗し、判読が困難になった碑文を翻刻するための研究を進めている（写真1）（河村ほか 2018: 328-329）。あるいは、劣化が進んだ津波碑の修復

（写真2）の技術支援をおこなっている（和高ほか 2021: 142-145）。こうした調査や修復の機会を利用して、津波碑が所在している地域の住民と交流し、寺社・石碑DBを紹介しながら、地域に残されている津波災害の記憶を再発見し、情報として追加していくことを試みたいと考えている。

フォーラム型情報プロジェクトは、データベースを完成させることだけが目的ではない。完成させたデータベースをいかに鍛え上げていくのかが求められる。今後は、2022年度から2027年度

にかけて新たに研究プロジェクトとしてスタートする人間文化研究機構基幹研究「地域文化の効果的な活用モデルの構築」（代表 日高真吾）のなかで、寺社・石碑DBのさらなる活用を考えていきたい。

引用文献

- 河村友佳子ほか 2018「3Dスキャナーを活用した津波碑の文字情報取得についての検証—高知県地震津波碑の事例から」『第35回日本文化財科学大会大会研究発表要旨集』pp.328-329。
- 寺村裕史 2021「津波の記憶を刻む文化遺産—寺社・石碑データベース」日高真吾編『復興を支える地域の文化—3.11から10年』pp.94-101。
- 日高真吾 2021「フォーラム型情報ミュージアムとしての『津波の記憶を刻む文化遺産—寺社石碑データベース』」『民博通信 Online』3: 6-7。
- 吉田憲司 2012「記憶をつなぐ—過去・現在・そして未来」『月刊みんぱく』36(9): 2-3。
- 和高智美ほか 2021「釜石市唐丹町『海嘯遭難記念之碑』の修復事例」『文化財保存修復学会第43回大会研究発表集』pp.142-145。



写真1 3Dスキャナーを用いた津波関係の碑文の調査（2017年11月、高知県南国市、和高智美撮影）



写真2 津波碑の修復作業（2021年3月、岩手県釜石市、八代陽子撮影）